

コラム⑱ のどの違和感について

～「咽喉頭異常感症」のおはなし+α

突然ですが、みなさんは、「のどの違和感」が気になったことはありますか？

「違和感」といっても、様々な症状があると思います。

「のどに何か物が引っかかっている感じ」、「のどに何かはりついている感じ」、「圧迫感」、「痰が切れない感じ」などなど…

これらを、「パターン1」の症状とさせていただきます。

また、のどの違和感に加え、さらにはこんな症状も伴う方もおられます。

「最近、痰が増えた」、「慢性的な咳が続き、近くの内科で肺の検査を行ったが、異常が無かった」、「のどがヒリヒリ、イガイガし、風邪かと思っていたらなかなか治らない」

これを、「パターン2」の症状とさせていただきます。

いずれの場合にも、耳鼻いんこう科で診察を受けるも、一言、「異常なし」あるいは「様子をみてください」と言われる場合が多く、「ドクターショッピングの原因となる、非常に有名な症状」と思います。

なお「ドクターショッピング」とは、患者さんが医療機関を次々と、あるいは複数個所を同時に受診することであり、別名、「青い鳥症候群」とも呼ばれます。

私の外来にも、他の耳鼻いんこう科を複数受診した後に、受診されるケースが連日のようにあり、個人的に憤慨しています。

もちろん、憤慨しているのは患者さんに対してではなく、その患者さんが今までに受診した医療機関に対してです。

中には某総合病院を受診し、「のどには何も無いから、心療内科を受診するように」などと言われたというケースもあります。

のどの専門家である耳鼻いんこう科は、当然、のどの違和感を改善する専門家でないといけません。

治療を他の診療科に投げ出すなんて、もってのほか！

さて、本題です。

まず、「パターン1」の症状について、お話ししますね。

これは、純粋な「咽喉頭異常感症（いんこうとういじょうかんしょう）」という状態です。

もちろん、耳鼻いんこう科の教科書にもちゃんとのっている病名です。

なのに医師は、患者さんに説明しないのです。

その歴史は古く、のどの異常感は古代ギリシア時代から記載があるといわれています。

「ヒステリー球」と呼ばれることもあり、東洋医学、漢方医学的な「梅核気（ばいかくき）」、「咽中灸癭（いんちゅうしゃれん）」の疾患概念とも一致します。

原因としては、下記のごとく様々なものがあげられています。

咽喉頭の悪性腫瘍や良性腫瘍、副鼻腔炎（後鼻漏）、舌根扁桃肥大、喉頭蓋の形態異常、過長茎状突起、茎突舌骨靭帯の化骨、頸椎異常、口蓋垂の過長、唾液分泌異常、食道癌、胃癌、胃下垂、食道潰瘍、食道炎、食道静脈瘤、食道憩室、アカラシア、マロリー・ワイス症候群、甲状腺疾患、性ホルモン異常、悪性貧血、Plummer-Vinson 症候群、糖尿病、強皮症などなど…

…うわー！！ものすごく多いですね！！
落ち着いてください。

これらの原因には、のどの違和感の絶対的な原因であるという、「証拠」はありません。

個人的には、『犯人さがしはしなくてよい』と考えています。

犯人さがしをすればするほど、さらに症状に心をとらわれますよ…

「のどにがんが出来ているのではないかという心配事」が、のどの違和感を増悪させることは、教科書的にも有名です。

私自身も過去に、扁桃肥大、甲状腺癌、バセドウ病、慢性甲状腺炎…と、のどの違和感に合併した様々な病気を見つけました。

しかし、これらの合併症が解決されても、ほとんどの場合、結局は患者さんののどの違和感は改善されませんでした。

ただし…

1%ほど、実際に食道癌等の悪性腫瘍が見つかることはあります。

症状が長引くようであれば、胃カメラは行っておいたほうがよいと考えます。

さて色々お話ししましたが、わかりやすく言うと、咽喉頭異常感症とは、「患者さんがのどの違和感を訴えて病院を受診したが、病院での検査で、明らかな症状の原因となるような異常を認めない状態」の事を指します。

対処法については、以下の2つの方針を患者さんと相談して決定します。

①「のどの違和感を感じても、必ずしものどに異常があるわけではない」という、

咽喉頭異常感症の病態を患者さんに丁寧に説明し、経過観察。

→のどの違和感の症状が気になりはじめてあまり期間が経過していない方、あるいは「がん」の心配をされて受診された方は、こちらの対処を行うことが多いです。

②「のどの違和感自体をやわらげる」治療を行う。

→症状の経過が長い方は、相談の上、「違和感自体の治療」を行います。

私は、漢方薬を中心に用います。

西洋の薬で違和感を抑えようとすると、「安定剤」が中心となってしまいます。

古来より、「半夏厚朴湯」という漢方が有効とされています。

もちろん症状に応じ、他の漢方を用いることもあります。

次に、「パターン2」の症状について、お話ししますね。

おさらいですが、「最近、痰が増えた」、「慢性的な咳が続き、近くの内科で肺の検査を行ったが、異常が無かった」、「のどがヒリヒリ、イガイガし、風邪かと思っていたらなかなか治らない」といったのどの症状が続く場合で、一見、風邪のような症状を伴う場合です。

こちら、「異常なし」として様子を見るように言われたり、感冒薬や去痰薬などの処方が行われるも症状が改善せず、受診される方が多いです。

こちら「咽喉頭異常感症」としてもいいのですが、経過観察ではなく、治療が必要なパターンです。

これらの症状はおおむね、「後鼻漏（こうびろう）」、もしくは「咽喉頭酸逆流症（いんこ

うとうさんぎゃくりゅうしょうが原因となっている場合が多いです。

まず後鼻漏とは、「鼻水がのどに下りたもの」です。

アレルギー性鼻炎や慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎等の鼻汁の一部が、のどに下りて症状の原因となります。

ご高齢の方は、「老人性鼻漏」といい、「鼻の粘膜の老化」でも鼻汁や後鼻漏が増加します。

後鼻漏は流れ下ることによりのどの違和感の原因になり、のどにたまと痰の原因となり、さらにはのどを刺激して慢性的な咳の原因にもなります。

最近は、「後鼻漏が原因となった慢性的な咳」も注目されています。

のどをカメラで診察し、後鼻漏が多いようであれば、原因となっている疾患の治療をまず行います。

また、「のどのイガイガ、ヒリヒリ感」を伴うのどの違和感の場合、「咽喉頭酸逆流症（いんこうとうさんぎゃくりゅうしょう）」の可能性も考えなければなりません。

咽喉頭酸逆流症は、最近特に増加しており、食生活の現代化が関連しているといわれています。

「逆流性食道炎（ぎゃくりゅうせいしょくどうえん）」と同じくくりの概念であり、胃液が「のど」にまで逆流し、のどの粘膜を刺激するため、のどの色々な症状が出現します。

「のどの違和感、イガイガ感」「慢性的な咳」「声がれ」などが代表的です。

前でお話した後鼻漏の症状と重複する症状もあるため、診断が困難な場合もあります。しかし、カメラによるのどの診察で、特徴的な所見を認める場合もあります。

治療は、逆流性食道炎と同様のものになりますが、難治性の場合もあります。

今回のお話しは、ここまで。

のどの違和感も、実にさまざまな原因で起こっているのが分かっていたかだと思います。症状が気になる方は、まずはお気軽にご相談くださいね。

次回は、「それ、本当に口内炎??」です。

病院で「口内炎」といわれ治療を行うも、症状がなかなか治らないという方。

それは、「口内炎」ではないかもしれません。

「舌痛症」を中心に、お話しします。